

ムーヴメンツの学習

ムーヴメンツの外観と形式、そしてそれが観客に与える印象について描写してきた。次は、ムーヴメンツは、それを実際に学ぶ人たちにとって、どのような意味をもつのかに、目を向けてみる。ムーヴメンツの学習には複数の側面があるが、ここではまず、そのうちもっともあからさまな、覚醒した意識状態への誘導という点に目を向ける。



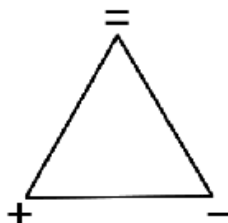
これについては、基本的な公式がある。ムーヴメンツはその学習者に一定の要求をし、学習者は意欲をもってそれに応答する。そして、要求と応答の適切な出会いにより、覚醒した意識状態がもたらされる。

グルジェフは、どんな現象も、能動(肯定)、受動(否定)、中和(調停)という、性質の異なる三つの力の出会いにより実現されると言い、それを「三の法則」と名づけた。それらの力は、それぞれ、第一の力、第二の力、第三の力とも呼ばれる。ふつう人は、第三の力にはなかなか気づかないが、これなしにはものごとは起こらない。起こることの質を決めるのも、この第三の力だという。

ムーヴメンツの学習では、ムーヴメンツから課される要求と学習者の応答という二つの力の出会いとバランスが体験の質を決める。ムーヴメンツの教師は、必要に応じてこの二つの力のいずれかを強めたり、二つの力のあいだに調和が生まれるのを助けたりすることで、個人を超えた不可知の力が第三の力として踊り手をつうじてあらわれるための場を用意しようとする。

ムーヴメンツは、瞑想的な環境で、教師から生徒へと、言葉を多用することなく伝達される。振り付けを記述したノートが生徒に渡されることはまれである。いま私たちが学ぶ可能性のあるムーヴメンツは、ほぼ全面的に、こうした学習の場で受け継がれてきたものである。

伴奏には、グルジェフまたは弟子のハートマンが作曲した音楽が使われ、これは、生徒が、ムーヴメンツに込められた意味を感情をもって理解することと、覚醒した意識状態を維持することを助ける。生徒は、教師の示す姿勢や動作を注意深く観察すると同時に、自分自身の身体への気づきを最大限に発揮して、それを正確に再現しようとする。このことにより、グルジェフが「自己想起」と呼ぶ、主体と客体への気づきが同時に存在する状態が、生徒のなかにもたらされる。また、正確なリズム、正確なタイミングという要請に応えることで、日常性の流れは瞬時に断ち切れ、生徒は、いやおうなしに、覚醒した意識をもって、「いまここ」に在ることを迫られる。



Enneagram Exercise
Exercice selon l'Ennéagramme



すぐれた禅の師が、さまざまな状況を縦横自在に活用して弟子を教えるように、ムーヴメンツは、さまざまな状況を設定して、そのなかで、包括的なアウェアネス(気づき)を維持するコツを、学習者に教えようとする。ある種の舞踏は、たえない姿勢の変化のなかで覚醒を保ち、瞬間瞬間に即応しながら、身体と精神のバランスを維持することを教える。ある種の舞踏は、ゆるやかで女性的な動作のなかで、エネルギーの微妙な動きを感じながら、高次の感情の高まりをつうじて、天地の力と一体となることを教える。

エクササイズの数多くでは、右腕左腕、右足左足、そして頭を、別々のリズムやパターンで動かすことが要求される。これは、右半身と左半身、あるいは上半身と下半身の動作の統合を教えると同時に、身体の一部に意識を固着させず、自己の全体への気づきを維持するコツを教える。また、身体の機械的な動作の癖に逆らうように、独特の順序とリズムで展開するように設計された一連の姿勢を、まちがえることなく再現するには、身体に生まれる機械的な衝動を、つねに見守る必要がある。すばやい動作の連続によって、油断のない、極度に覚醒した意識状態へと踊り手を誘導する舞踏もあれば、その対極には、ゆるやかで反復的な動作の催眠的な作用に逆らって、気づきを維持することを教える舞踏もある。

ムーヴメンツの学習は、ある程度の努力を必要とするとはいえ、それは深刻なものでも、無味乾燥なものでもない。しかもそれは、私たちが日常的に知っている努力とは、まったく質が異なっている。私たちが日常的に知っている努力は、必然的に緊張をとまなうような、一点への集中であり、心身の特定の機能の偏った使い方であり、対象への同一化のあまり、完全に自己感覚を失った状態ではないだろうか。ところが、ムーヴメンツの構造そのものが、そうした機械的な努力を許さない。学習者は、しばらくの試行錯誤ののち、「別種の努力」の感触に目覚める。必要とされるのは、自分自身の全体をもってトータルに関与すること、そして、リラックスした境地から生まれる、包括的なアウェアネスを身につけることである。機械的な努力が人を消耗させるのに対し、この別種の努力は、エネルギーの高まった、自若とした状態へと、人を導く。そこには、トータルに存在すること、十全な意識をもって存在することの喜びがある。

熟練した踊り手は、異なる規則にもとづく身体各部の動作に加え、リズム、バランス、歩幅、他の踊り手との位置関係など、さらには頭のなかでするカウンティング、一連の動作の手順を記憶から引き出すタイミング、そして、身体の動きと音楽とが心のなかに生み出す感興のすべてを意識しながらも、そのどれにも同一化することなく、観照者の立場に留まろうとする。これは、踊り手のなかに圧倒的な自由の感覚をもたらし、その一部は、それを見る者にも伝達される。もちろん、そのような熟練の境地に達するまでには、一生かかるかもしれないが、そのような境地を垣間見ることは、学習の初期でも不可能ではない。

